

# 思ひ草

第39号

令和4(2022)年11月30日 発行

## 実践力を養うセンターとしての願い、 活躍を期待！！

健康体育学科教授 はら ひでき 原 英喜

この「思ひ草」創刊号に、初代センター長の田沼茂紀教授は「教職の世界に向けて歩み出す若者の夢を語り、希望を育み、勇気を与えられるセンターにしたい」と書かれていました。小笠原優子先生を中心に、多くの先生方の協力を得て運営され、今や「不可欠な、そして困ったときの教育実践総合センター」と学生たちに頼りにされています。さらに、地域の学校や園からも、よき相談相手と理解して頂いていると思います。

私が最初にこのセンター事業の教育インターンシップに携わったのは、横浜市立美しが丘中学校で体育の授業に関わった健康体育学科の学生の活動を見学しに行ったときでした。この学生は本学部付設のもう一つのセンターである地域ヘルスプロモーションセンターの活動にも積極的に参加しており、実際に学校現場に臨むことで授業では得られない経験を積んでいきました。卒業時には横浜市の中学校体育科教員として採用されました。

COVID-19の感染拡大前には、プールのない本学ということもあり、「泳げるようになろう(プール)」「臨海学校見学と小遠泳体験(千葉県岩井・館山の海浜)」をセンター事業の“未来塾”として企画し、さらに「健康安全・体育的、集団宿泊の行事としてのスキーを学ぶ(長野県志賀高原)」などの提案を実現してきました。参加者は多くはなかったのですが、授業では経験できない実践の場を提供できました。地域の学校関係の研究会、学校運営協議会や夏季教育フォーラムなど他の多くの企画とともに、教育現場で望まれる実践力や協調性などの大事な要素を育てるという目的に沿った運営が行なわれています。

学生と教職員がともに教育現場へ学びに行くことの大切さは誰も感じています。受け入れて下さる学校や園などの施設・スタッフのご苦勞や理解を得て、明日の教育現場に貢献できる人材を育てていくために、このセンターが稼働し続けて行くことを願っています。

## 現場に学ぶ

子ども支援学科教授 のざわ じゅんこ 野澤 純子

「子どもにとって大切なこと」を問うと、学生達がある言葉をよく口にします。自己肯定感です。自分が若かった頃、この5文字を日常的に耳にすることは、あまりありませんでした。続けて「子どもを沢山ほめることが大切です」と学生達は言います。

一方保育現場では、この流行り言葉に振り回されてしまうことがあります。私は障害児の保育や心理が専門であるため、巡回相談員として園に出向いて保育者支援をしています。「あの子には褒めるところが見つからないんです」という悩みをしばしば耳にします。頻繁ないたずら、クラスからの飛び出し、お友達を頻繁にたたき、といった手のかかる子どもの相談です。園庭に出ると、「あ、あの子ね」相談児はたいていすぐに見つかります。その子どもの名前が保育者の口から出る時には、セットで「あぶない」、「いけない」、「それはちがう」といった言葉が続くことがほとんどだからです。私が初めて巡回相談をした頃から、この状況はあまり変わっていません。

どうしたらいいだろうか、と先生方とあれこれ話し合います。保育者のポケットには、たいてい指導や遊びのアイデアが、ぎゅうぎゅうに詰まっています。私は、詰込みすぎのポケットからアイデアを引っ張り出すお手伝いをします。ある先生は、あの子に制作に使う折り紙を運ぶ係や簡単な手伝いをさせ、またある先生は、あの子が好きな宇宙をテーマに集団遊びをします。そして「ありがとう」、「助かった」、「良く分かった」、「楽しかった」と、みんなの前であの子に声をかけます。

久しぶりに園へ支援に出掛けると、園庭を見回してもあの子がすぐに見つかりません。クラスに馴染んでいるのです。ポケットマジック、とでも言いませんか。支援という言葉には、一方から他方へ与える、といったニュアンスがあります。実際には、支援する側と支援を受ける側が互いに関わるなかで、逆に支援者が学ぶことが多々あります。私も同じ、いつもあのポケットから多くを学んでいます。

## 教育実習

### 学生の教職志望と教育実習

初等教育学科助教 <sup>まえだ むぎほ</sup> 前田 麦穂



学生にとって教育実習は、実際に学校現場の中に入り教育実践を学ぶ貴重な機会です。それと同時に、教職への志望を左右する大きなターニング・ポイントにもなっています。このことを明らかにした最新の調査が、「教職課程を置く大学等に所属する学生の教職への志望動向に関する調査」(文部科学省委託、株式会社浜銀総合研究所により実施)です。同調査は2022年2～3月、全国199大学の卒業年度にある4年生9,291名がオンラインで回答しました。

同調査によると、卒業後に学校教員になる学生の約8割が教育実習の「経験後に教職への志望度が高くなった」と答えていました。教育実習が教職志望を大きく後押しする機会になっていたことがわかります。しかし、卒業後に教員以外の進路に進む学生(単位は取得済み)のうちでは、教育実習の「経験後に教職への志望度が高くなった」者は約5割に留まり、「経験後に教職への志望度が低くなった」者が約3割に上りました(「経験前後で志望度は変化しなかった」が約2割)。すなわち教育実習が学生の教職志望を後退させ、教員以外の進路に向かわせる要因の一つになっていたといえます(なおこの傾向は、教員免許取得が卒業要件になっているかどうかに関わらず共通していました)。

以上の結果からは、教職志望の向上や維持のためには、学生が教育実習での様々な経験(特に、失敗やうまくいかなかった経験)をよりよくとらえ直せるよう、大学が実習後のサポートにより力を入れていくことが重要だと考えられます。教育実習での経験をよりよいものとするため、大学による事前指導や実習中の訪問指導が重要であることはもちろんですが、上記調査結果が明らかになったことで、事後指導の重要性も再確認されたといえます。今後も教育実習を経験する・した学生の力になれるよう、実習の前後を通じた長期的視点から教員としてサポートを行っていきたいと思います。

### 国語の授業を通して

初等教育学科 3年 <sup>しまだ みさ</sup> 島田 実咲

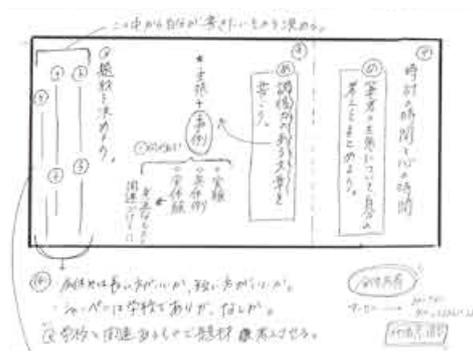
私は教育実習中に、小学6年生の国語「説明文・論説文」の単元を一通りやらせてもらった。

最初の授業では、計画通りにいなくて焦ってしまい、指示出しがうまくできずで、児童たちの頭から「？」が見えるほど、児童の気持ちが遠ざかっていた。その児童のわからないを解決したくて、また自分1人で喋ってしまった。私は「教師が話せば話すほど児童は離れていく」ということをその場で身をもって実感し、教師は手助け(ヒント)を与えるだけでよく、何から何まで話そうとしてはいけないのだと学んだ。また、児童が主体的に学ぶ授業展開の難しさを痛感した。

授業中では反応が静かだったり、発言が少なかったりして、うまくいかない時が沢山あったが、児童や先生方のアドバイスを素直に聞いて、それらを意識して授業を重ねていくうちに、時間の使い方や板書の仕方、言葉かけ(価値づけ)の仕方など、最初よりうまくできるようになり、日々自分の成長が目に見えて分かった。

国語の最後の授業では「今までの学習を活かして、自分の説明文を書こう」という授業を行った。その時に、机間巡視では今まで習った説明文を書くときのポイントを意識しながら、子どもたちに考えさせる声かけをし、分かりやすい文章の書き方や内容に合った具体例を書いている児童を価値づけして全体共有することを意識した。別日に児童から「島田先生が授業で言っていたポイントを思い出しながら川崎市文集を書いたら、クラスの作文代表に選ばれたよ!」という手紙をもらった。自分が授業中に言った言葉が児童の中に残っていて、それが授業外でも活かされていることを知って、とても嬉しかった。

授業には正解がないからこそ、難しいし、大変だけど、こうやって自分の一つ一つの言動が児童の心に響き、生活の中に生かされていると思うと、教師の仕事にとってもやりがいを感じ、教師の言動や行動はとても偉大だと感じた。



## 教育インターンシップ

### 実践から学んだ幼稚園の先生の楽しさ

子ども支援学科 2年 さかい ほんね  
真境名 春音

私は5月から6月にかけて幼稚園で教育インターンシップに取り組んだ。私にとって今回の教育インターンシップは初めて直接子どもと関わる機会だった。子どもの様子、幼稚園の1日、先生の仕事など初めて知ることばかりで毎回とても刺激的だった。

まず、先生の言葉掛けが子どもに大きく影響することを実感した。片付けをしない子どもが先生に「おもちゃがうちに帰れないって泣いているよ」と言われたら片付けをしたり、ゲームをしているときに先生がみんなの前で「〇〇ちゃんの応援素敵だね」と言うとみんなが応援したり、先生の発言で子どもの行動が変わることを感じた。先生が否定的な表現や指示するような言い方はせず、優しく子どもとしっかり向き合っている姿も印象的だった。先生だけでなく私の言葉掛けでも苦手な野菜を食べられた子がいて、言葉掛けの大切さを身をもって実感することができた。この経験から先生の言葉掛けがどれだけ子どもにとって影響するか、どれだけ考えて発言しなければいけないかを学んだ。

また、3、4、5歳児すべてのクラスを見たことで各学年の子どもの様子の違いを学ぶこともできた。例えば遊び

の時間、3歳児は同じ場所に何人かであるが一人ずつばらばらに遊んでいる。しかし4歳児は何人かで遊んでいるところに「いれて」と言って仲間に入れてもらう様子が見られたし、5歳児は何人かの子どもが「鬼ごっこやる人この指と一まれ」と言って仲間を集めて遊んでいる様子が見られた。遊びだけでなく、登園降園の準備の様子、食事の時間などでも年齢ごとの子どもの違いが見られた。また、同じクラスでも月齢などによる成長の個人差を見ることができた。年齢や月齢に伴う子どもの成長は授業でも学んでいたが、直接子どもたちの様子を見ることで学びが深まった。

ほかにも教育インターンシップで学んだことはたくさんある。しかし実際に子どもと関わって一番良かったことは、幼稚園の先生の楽しさを体験できたことだ。子どもがとてもかわいくて、子どもが好きだと再確認することができた。これは学校では経験できないが、実際に幼稚園の先生になる上で一番大切なことだと思う。そして教育インターンシップ後の学校の授業では、実際に子どもの姿を想像しやすくなり、より深く学べるようになった。これからも教育インターンシップの経験を学校の授業、そして実習に生かしていきたい。

## 教育インターンシップ連絡協議会

令和4年7月7日(木)16:00~17:00に令和4年度教育インターンシップ連絡協議会をオンラインで、開催いたしました。今年度、教育インターンシップに関わる学生は、子ども支援学科54名、初等教育学科102名、健康体育学科22名、計178名おります。

当日は、教育インターンシップ受入れ校・園の先生方が9名出席してくださいました。

まず、成田信子学部長より教育インターンシップの意義と受入れ校・園の先生方への感謝の言葉がありました。その後、大学のスタッフ紹介がなされ、今年度の教育インターンシップの実施状況について、幼稚園・児童福祉施設については、廣井雄一先生、小学校については、小笠原優子先生、中・高等学校については、植原吉朗先生、特別支援学校については、高橋幸子先生より報告がありました。すでに教育インターンシップの実習が始まっている学校・園の先生方からは、どのような実習を行っているか、また学生の実態などについてご意見、ご感想をいただきました。大学にとっても、実習のあり方を考える上で貴重な情報交換になりました。

最後に今後の教育インターンシップに関わる手続きや単位認定等についての説明を行い、次回は令和5年1月24日に「第2回教育インターンシップ連絡協議会・報告会」を実施することを伝え、閉会となりました。

## 夏季教育講座

### 量的変化が質的变化を生み出す — オンライン開催を終えて —

こんどう よしひこ  
教育実践総合センター長 近藤 良彦

昨年と今年の夏季教育講座はオンラインで開催された。これは意図されたものでなく、コロナ禍に対応するためのある意味やむを得ない措置であった。それでも、参加された方の反応はとともよかった。高橋幸子副センター長が中心となって行われたアンケートでは、このオンライン開催について、「とても満足した」が昨年は61%、今年は74%となった。これに「おおむね満足した」を加えると、昨年は97%、今年が99%とほぼ百パーセントに近い値となる。

このような高い満足感を実現した要因とは何か。その一つは講師の方々にそうそうたるメンバーをお迎えできたことであろう。知識と経験に彩られた各分科会における講演のテーマが興味深く面白いものであったことは勿論であるが、それを伝えるプレゼンテーションはいずれも視覚的に訴えながら聞き手の理解を促す工夫が施されており大変参考になった。そしてもう一つが、参加者の意欲と経験から得られた知識と技術であろう。ほとんどの参加者がパソコンやタブレット、スマートフォンといった情報端末の操作に慣れていて、以前から慣れ親しんでいた方もそうでない方もコロナ禍という特異な状況に対応するために、短期間に膨大な知識と技術を身に付けたに違いない。

これらの背景にあるものに思いを巡らせると「量」という言葉が浮かんでくる。私がパソコンを使い始めた頃の記憶媒体の主流は、一枚が1メガバイト程度のフロッピーディスクだった。数年後には数百メガバイトのハードディスクなるものが登場し、年々記憶容量が大きくなってギガバイトからテラバイトへと、フロッピーディスクの百万倍にもなっている。さすがにこれだけ記憶容量があれば少ないと感じることはなくなってきたが、この「量」の増加が、あるとき新たな「質」を生み出したと覚えてならない。その一つがインターネット環境である。もちろん、記憶容量が大きいだけで生み出されるわけではないが、この量が大きくならなければ誕生しかなかったのは確かである。

もし情報端末を持つ人が1割程度だったら、通信量が小さくて文字のやり取りしかできなかつたら、大きな満足感は得られなかつたであろう。十分な量があったからこそオンライン開催が可能になり、そこには新たなコミュニケーション方法という「質」が生み出された。これは、量的変化が生み出した質的变化である。ただし、人と人が直接会って行うコミュニケーションに代わるものではない。テレビがこんなに発展しても匂いや味を伝えられないように、オンラインでは出来ないことはある。我々は新しい質を手に入れたらしいが、それは新たなものであって代わりになるものではない。

どんなにメディアが発達しても、新聞に目を通さないと落ち着かないし、紙の本を手にして読まない満足できない。なぜか、それらからしか得られないものがまだまだある。少し、いや、かなりかな。古い人間なのかも知れませんが。

